

主日礼拝

2023年9月10日（日）

題 「イエスの弟子となる」

テキスト：ルカによる福音書14章25～35節

皆さま、おはようございます。

教会につながるようになったいきさつは、人それぞれいろいろだったと思います。わたしの場合は、仏教の家に生まれ育ち母は熱心な浄土真宗の信者で、よく仏壇に向かってお経を唱えていました。朝食や夕食の前には子どもたちも仏壇前に座らなければ食べさせてもらえませんでした。そのことを、それほど抵抗もなくそんなもんだと思っていました。

大阪に住んでいた頃、二十歳前に塚口の大手の電機会社に務めていたころ、合唱団に入っていました。そこに何人かのキリスト者の方がおられて、言葉使いやその振舞い方により印象を持ちました。同じ年の合唱団のメンバーの方も教会に通うようになられ、そんなことに影響を受けたのかわたしも家の近くの長屋の教会に行ったのです。人数は多くて10名もいないような集まりでした。最初はだまされるのではないかと心配もありましたが、思いきって教会の扉を開きました。しかし、礼拝の讃美歌に不思議に心が落ち着いたのです。牧師夫妻や信徒の人たちの温かさをうれしく感じました。

その後、牧師の勧めもあり洗礼を受けました。聖書はまったくと言ってよいほど読んでいませんでした。教会に通うようになって聖書を読み出し、わたしの心に残ったことばは、マルコによる福音書に記されたイエスの言葉でした。口語訳聖書の1章17節のイエスの招きの言葉でした。17節、イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」という言葉でした。そのことばの内容も分からず、「わたしについてきなさい。」という招きのことばにイエスについていきたいと思ったのです。しっかりとイエスに従ったかどうかは別にして、今までの人生の曲がり角でことあるごとに、このイエスの言葉がわたしの心に迫って来たことは事実だったように思います。

さて、今日の聖書の言葉に聞きましょう。イエスは自分の周りに集まっている群衆の人たちにイエスの弟子の心構えを語られています。今日の箇所は、短いことばが重なっていて理解するのが難しい箇所のようにも思えます。

まさに、34節の最後のことばの、「聞く耳のある者は聞きなさい。」だと思わされます。

◆弟子の条件

25:大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。ついて来た人々へのイエスの呼びかけ、語りかけが行われました。神の都と呼ばれていたエルサレムの町に向かう決意を固めたイエスでした。

26:「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。この言葉はマタイによる福音書 14 章 25 節以下にも記されています。

このイエスの言葉は、厳しい言葉だと思います。「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら」とありますが、特に「これを憎まないなら」ということばに戸惑います。ただ「憎む」ということばの意味は、「後回しにするとか断念するという意味」だとも言われます。つまり、イエスに従うことは、父であれ、母であれ、妻であれ、子供であれ、兄弟であれ、姉妹であれ、血のつながりを第一とすることではない、家族は大切だけれども一番にすることではない。ということです。イエスご自身は、30歳になり家族から離れ、神の支配と愛を言葉と行いで人々に伝える、いわゆる公生涯に入られました。そして33才で十字架につけられて死を迎えられました。

ところで家族を一番にする組織や団体は、最初は盤石に見えてもついには長い歴史の中で腐敗したり、衰えついには滅んで行くケースもあることも事実です。どういう人たちの集いであれ、

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」というイエスの言葉が迫って来ます。神の支配と神の真実を一番とするということです。他は絶対ではないということです。

またイエスは、自分の所に来た人たちに、

「27:自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」とも言われます。神から与えられた、自分に課せられた重荷を背負ったままでイエスについて行くということです。しかし、イエスは「わたしの軛（くびき）は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」（マタイ 11 章 30 節）、とも言われました。また伝道者パウロも、神とイエス・キリストを伝えた自身の経験・体験から「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共にそれに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」とコリントの信徒への手紙 10 章 13 節で語っています。「逃れる道」とは出口とも言われます。憐れみ深い神は、わたしたちに試練からの出口もちゃんと用意してくだ

さるというのです。

ともかくイエスは自分の意思で従う者たちを求め、ついて行く覚悟を求められたのです。これは一時的な感情の高ぶりや気分ではなく、冷静な意思から来る心構えです。イエスは中途半端な決意が失敗や敗北に至るということを知っておられ、二つのたとえでそこにいる人々に教えられたのだと思います。時を超えて、ここに集ったわたしたちにも語られている言葉なのです。

たとえの一つは、**塔を建てる場合のたとえ**です。この場合塔とは、見張りの塔か、城壁にしつらえる防御用の塔。邸宅との意味もあると受け取る人もいます。もう一つは**戦いの時のたとえ**です。

28:あなたがたのうち、**塔を建てようとするとき**、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず**腰をすえて**計算しない者がいるだろうか。

「まず腰をすえて」とは、心落ち着けてじっくり考える。自分の意思が固まるまで、神さまに祈りつつ考えるのです。熱い心と冷めた頭が必要なのだと思います。思いつきや、一時的な感情だけで事を始めると、

29:そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけって、30:『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。塔を建てようとする時には、事を成そうとする時には、自分の状況を冷静によく見つめ、知り、周到な準備をすること。そうしないと目的を達成できないばかりか、人に批判され、笑われることになりかねないということです。

31:また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、**二万の兵を率いて**進軍して来る敵を、**自分の一万の兵で迎え撃つこと**ができるかどうか、**まず腰をすえて**考えてみないだろうか、とイエスは言います。。

ここにも「腰をすえて」という言葉が出ています。

戦いへの備えをするということは、まず自分自身を知ることが大切なのです。

32:もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めるだろう。必要なことを行っていくのです。

33:だから、同じように、**自分の持ち物を一切捨てないならば**、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」自分の持っているもの

を、冷静に確認して、それを捨てる。捨てるとは、改める、用いるとも受け止めれるのではないでしょうか。

エルサレムに向かう、十字架の死を覚悟されたイエス従うということは、今まであったもの、自分との関係、人との関係、持ち物や考え方などを新たに
して行く道でもあるのだと思います。そのためには覚悟が必要なのです。
その時、新しくイエスにあって神の救いに預かって行く道が生まれて行くのです。神が歩むべき道を示してくださるのです。

最後に、イエスに従う者たちの覚悟について塩の働きが語られています。

◆塩気のなくなった塩

34:「確かに塩は良いものだ。だが、塩も塩気がなくなれば、その塩は何によって味が付けられようか。

35:畑にも肥料にも、役立たず、外に投げ捨てられるだけだ。聞く耳のある者は聞きなさい。」

イエスに従う者たちやその働きは、この世にあって塩のような存在であるというのです。まわりを味付けして行く。腐敗を防止する。塩気がぬけると、体にもよくない影響が出ます。塩も塩気がなくなれば、畑にも肥料にも、役立たず、外に投げ捨てられるだけだと。キリストにある群れ、教会も塩味を持ち、腐敗防止。味付け。周りをいかすことで自分たちも新しく生きる群れとなっていくのです。「聞く耳のある者は聞きなさい。」と主イエスは今も呼びかけておられるのです。

この時、主の教会につながる私たちは、神の憐みの下でイエス・キリストと共にあることを一番として日々、目覚めつつ新たな自覚と決意を持って歩みたいと願います。

みなさまの上に主の平安を祈ります。 共に黙想しましょう。